

### 3. 取組内容の進捗状況 (2022年度)

【京都大学・東京外国語大学】

【事業の名称】 (採択年度 令和2年度 タイプA)

アフリカにおけるSDGsに向けた高度イノベーション人材育成のための国際連携教育プログラム

#### ■ 交流プログラムの実施状況



〈短期交流プログラム参加の学生たちと 2022年12月〉

・京都大学では2022年10月から12月にかけて実渡航による「短期交流プログラム」を実施し、学術提携のあるアフリカの大学に所属する学生計13名(8ヶ国)を受け入れ、全員がプログラムを修了した。学生たちはSDGsをテーマとした集中講義・日本語基礎講座・受入教員による個別指導を受け、プログラムの一環として京都市動物園、琵琶湖疏水記念館、ダイキン工業淀川製作所、サラヤ株式会社大阪工場での学外視察を実施した。国際合同コンフェレンスでは計55名が参加し、受入学生13名、他5名が研究発表を行った。

・東京外国語大学では、実渡航を伴う受入(長期留学プログラム)として、4月から1名、10月から5名を受け入れた。オンラインプログラム(短期留学プログラム)の受入では、2023年2月、4つのプログラムで構成される「2022年度日本オンライン・スタディツアー」を実施し、すべてのプログラムを修了した3カ国4大学7名に修了証を発行した。国際合同コンフェレンスでは63名が参加、4カ国から学生12名が発表し(11月東京開催)、さらに2023年3月にガーナで開催し100名が参加、6カ国から学生16名が発表した。

#### ■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

##### ○ 日本人学生の派遣

- ・京都大学では短期・長期派遣として、アフリカ13カ国に34名を派遣し、フィールドワークを基盤としたプログラムを実施した。
- ・東京外大では、長期留学(実渡航)として、3カ国へ5名を、短期留学(実渡航)として1カ国へ1名を派遣した。短期留学(オンライン)の派遣では学生7名が単位取得した。

##### ○ 外国人留学生の受入

- ・京都大学では短期留学として8カ国から13名を受け入れ、全員が修了した。
- ・東京外大では、3カ国から6名を受け入れた。また、短期留学(オンライン)の受入では3カ国7名が修了した。

	2022(R4)	
	計画	実績
学生の派遣	16	49
学生の受入	16	26

#### ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

- ・京都大学では、担当教員をエチオピアに派遣し、アジスアベバ大学での単位互換やコチュテルの制度化に向けた協議をおこない、新たにダカール大学とも部局間学生交流協定を締結した。また、京都大学および東京外国語大学とアフリカの各大学教員の間で、シラバス、単位認定、成績管理の方法に関し対面で意見交換を行った。
- ・日本側とアフリカ側の教員とで対面での意見交換を行ったことで、実際の運用開始を前提として、個々の大学の事情に即した形でのシラバス、単位認定、成績管理に関して具体化することができた。

#### ■ 外国人学生の受入、及び日本人学生の派遣のための環境整備

- ・京都大学では、教員・事業雇用研究員の計13名が計29回アフリカ諸国の協定校・関連組織に渡航し、2022年度の4月から実渡航を伴う長期・短期交流プログラムを実施する連携体制を整備できた。その結果、4月には派遣・受入を希望する学生の公募を速やかに実施し、日本学生支援機構(JASSO)の協定派遣・受入制度の奨学金を利用した渡航が可能となった。
- ・東京外国語大学では、教員が9月に南アフリカ出張し、ステレンボッシュ大学・プレトリア大学および大使館から得た情報を基に南アフリカ留学説明会を実施し、次年度以降の派遣学生に情報提供をおこなった。また次年度の南アフリカ派遣予定学生を対象に詳しい情報提供と受入大学国際局職員を仲介し、学生の円滑な留学準備を支援した。

#### ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況・情報の公開、成果の普及

- ・京都大学では、アフリカ研究実績が豊富で英語に堪能な特定研究員2名、米国の博士号を所持する特定専門職員1名、英語対応可能な事務補佐員1名、東京外国語大学ではアフリカ研究実績が豊富で英語に堪能な特任助教1名を継続して雇用することで、国際的な事務局体制を整備した。
- ・事業HP、大学公式HP、Twitter、Facebook、Slack、メーリングリストを通じて積極的に成果を発信した。また、2022年度も日本・アフリカ大学連携ネットワーク(JAAN)と組織的に連携し、情報共有やイベントの案内、教育交流事業の紹介等、アフリカとの教育交流に関心のある国内の大学と効果的に情報共有・成果発信を実施した。

#### ■ グッドプラクティス等

- ・京都大学、東京外国語大学ともに、アフリカから受け入れる学生には予備的教育をオンラインで実施する一方、渡航後は、集中講座、企業等の視察、国際合同コンフェレンスでの発表などを通じて、個別指導や実体験を基盤とした教育プログラムを実施し、オンライン形式と対面形式の学習機会を相補的に組み合わせることが出来た。また、両大学の日本人学生も、アフリカ各国の協定校への派遣を本格的に進め、各協定校の窓口教員が、現地での授業やフィールドワークを適切に指導し、学位論文の共同指導を行った。



〈第3回国際合同コンフェレンス集合写真(2022年12月19日)〉